

2. 犯罪被害による精神的被害からの回復過程

6) 精神的被害からの回復過程における現実

被害からの回復はもっぱら被害者自身の主体的な取り組みによる

「真相の究明」と「責任ある者による心からの謝罪」なくして回復には向かいがたい

回復過程は圧倒的な孤立感と無力感から始まる人間関係の中で回復することを心掛ける

深い悲しみを取り除くことはできない

遺族はかけがえのない被害者を忘れることはない

遺族には人生観や価値観の徹底的な問い直しが生じる

2. 犯罪被害による精神的被害からの回復過程

7) 喪に関する現実

服喪者が直面する現実 (Rando, 1993)

悲嘆は時間の経過に伴って緩和される部分もあるが、遺族、特に子どもと死別した親の経験するところでは時間の経過に伴って悲しみと辛さが募ることが多い。遺族にとって、大きな転換期を迎えるたびに言いようのないやるせなさが募る。

死別体験の質によって喪の過程は異なる。

精神的回復に向けた過程として、あまりの衝撃のために感情表出できない時期も存在する。無理に感情表出を強いると、回復過程が複雑化することもある。

2. 犯罪被害による精神的被害からの回復過程

服喪者が直面する現実(続き)

服喪者にとって愛する故人を忘れ去ることなどけっしてない。服喪者にとって「回復」とは、よい思い出と想起したくない思い出との棲み分けを心の中で行い、悲しみを抱きながら生きていくことである。

悲嘆は服喪者の心理面のみならず行動面、社会面、身体的・生理学的側面にも影響を及ぼす。

服喪の強度や期間には多様な要因が影響を及ぼす。被害前の生活におけるストレスへの対処の仕方、被害直前・直後の重要な変化、故人との関係の質、故人が被害に遭った状況、二次被害の実態、被害後に新たに生じた問

2. 犯罪被害による精神的被害からの回復過程

服喪者が直面する現実(続き)

題、信仰心や民族的慣習、家族や友人による心の支えなど。

愛する家族との死別には多様な二次的対象喪失(健康、仕事、家族、親友、将来、信念、信仰心など)が伴う。

それらをめぐる喪の作業にも直面させられる。

予期的な死別とはまったく異なり、突然の、悪意に満ちた暴力によって家族の命を奪われた場合、喪の過程は複雑になり、回復への糸口が見いだせない心境に陥る。

遺族の観点からすれば、服喪の過程は一生続く。被害からの「回復」は完結しない。

8) 悲嘆

悲嘆：(長年月に亘る)深い悲しみ

・母の悲嘆と父の悲嘆

<http://www.compassionatefriends.org.uk/>

2. 犯罪被害による精神的被害からの回復過程

9) 被害回復に関する段階説 (Herman, 1992)

初期段階：麻痺と回避 (主題は「安全の確立」
= 心理的・生理的反応の統制)

中間的段階：服喪追悼 (主題は「想起と服喪
追悼」= 内界における外傷体験との
折り合い)

最終段階：信頼の絆の(再)構築 (主題は「通
常生活との再結合」= 相互信頼に基
づいた社会的関係の再構築)

回復が進めば無力感や孤立感に圧倒されなくなるが、
深い悲しみは一生消えない。